

## 「黄昏の太宰府」便り（第4回・最終回）

### —地方都市が生き残るための条件とは③—

長濱和代（大学教員）

#### 【地方都市での大学教員職が任期満了となる】

太宰府市内の私立大学に着任して、3年目を迎える。この2月に上司との面談があり、3月で任期満了にて職務の継続はなし、「残念ながら、総合的判断として引き続きお願いするとの結論に至りませんでした。」とのこと。唐突な話に2週間くらい、なぜだろうか？と自問自答している。

前回のコラムで大学において「学生は大切なお客さま」と書いたように、学生がいなければ、私立大学の経営は成立しえない。私は長崎県の公立高校10校余りと私立高校1校を担当しており、それらの担当校から毎年3~4名の高校生たちに入學いただいている。ただ昨年は2回しか訪問しておらず、入學予定者はまだ2名の学生に留まっている。入試担当の先生によれば、年に少なくとも4回は高校を訪問すると良いとのことであったので、その点で私は貢献度が低く、高校生を獲得するための営業成績が低かったのかもしれない。

しかし大学は本来、高等教育機関として研究と教育を推進していくことを目的としているのではないだろうか、と私は考えている。その貢献を果たすべく、私はセンター長（管理職）となり、学内の研究を牽引してきた。昨年は3冊の本を出版、昨年度の科研費（基盤C）の採択に続き、今年度は研究公開促進費（学術図書）を獲得して、博士研究をまとめ、本を出版した。その他にも共著で2冊を刊行、英語論文や学内の大学紀要も主著者として執筆した。また学内では実務家教員が半数以上を占めることから、研究論文を執筆できる教員を増やそうと、EBSCOから講師を招聘して英語と日本語文献の検索のための英語と日本語による講習会を開催したり、自分が講師となって科研費採択のための勉強会を実施したり、さらに新しい教職員が年度途中に入れば、人的ネットワーク構築のための懇親会を開いて、それぞれの部門で良いチームが組織できるように心を配ってきた。その懇親会では、ウクライナから受け入れた留学生たちも交えて、時には20名近くの教員・学生たちが参加し、「長濱会」とも呼ばれるようになったことから、経営陣はその草の根的な活動を良く思っていなかった可能性もある。

新年度における学生入学者数は、2月において定員充足数の8割に達しており、現状の経営全般は悪くはないように見える。本学の経営はトップダウンの構造になっており民主主義的にボトムアップを起こそうとしてきた私の行動は、指揮系統を乱す行為に相当することから、「総合的判断として引き続きお願いするとの結論に至りませんでした。」ということになったのではないかと考察している。

#### 【管理職のミッション】

組織をまとめ、動けるチームづくりを目指し、少しでも働きやすい（楽しい）職場に変えていくことは管理職のミッションであるが、そこにはトップとの良い人間関係が必要であるということが、今回の件で分かった。長濱は目立ち過ぎて、トップとのせめぎ合いがあったのではないかと、という声も聞かれる。次の職場では、おとなしく、自分のミッションを果たし、少しでも地域や社会に研究を役立てる努力に励みたい。

#### 【まず自分たちが生き残り続けよう】

黄昏れていく地域が消滅せず、生き残り続けるためには、まずそこにいる自分たちが生き残る必要がある。私の場合、「黄昏の太宰府」に残れず、この地域から離れることにより、自分が「よそ者」になること

<input type="checkbox"/>	生態系	地域全体としての多角形のつながりがしっかりしているか？
<input type="checkbox"/>	集い	みんなが集まり、話す場や機会がつけられているか？
<input type="checkbox"/>	連結	地域全体をつなぐ組織や人材、拠点が機能しているか？
<input type="checkbox"/>	連関	生産だけでなく、加工・販売も連動し、効果的な連関が生まれているか？
<input type="checkbox"/>	女性	女性が活躍するポジションがあるか？
<input type="checkbox"/>	後見人	移住者や若者を支えるベテラン住民の存在はあるか？
<input type="checkbox"/>	法人	機動的に動く会社・事業組織が存在しているか？
<input type="checkbox"/>	楽しみ	暮らしを豊かにするアートやサークルの要素があるか？
<input type="checkbox"/>	窓	閉鎖的でなく、外との交流の窓口があるか？
<input type="checkbox"/>	情報	地域内外への情報発信・共有の仕組みを持っているか？

図1 元気な地域社会をつくる10か条（2022 藤山）

を考えるのは何とも寂しい気持ちになる。とはいえ「よそ者」として、今後も出入りをする事により、「関係人口」としてカウントされるなら、この地域の経済的な豊かさに貢献できるのではないかと考える。地域の魅力をアピールすることにより、黄昏れの地域へ仲間を誘い込むのも悪くない。インターネットやSNSを活用して、魅力を発信し続けてもいい。私たちの学生時代は、FAXですら魔法のツールに思われたが、今の大学生たちはインターネットの利用は、食事をする事と同じくらいあたり前の様子で、「スマホを持っていないと落ち着かない」という声すら聞こえる。

### 【地域から循環型の社会をつくる】

地域都市が生き残るための条件について、もう一步、踏み込んで考えたい。「元気な地域社会をつくる10か条」という試案がある(図1)。その中では、生態系から情報に至る10つの条件が考えられていて、黄昏れていく地域が、消えることなく生き残るための具体的なポイントを明示している。これらの要素は決して十分であるとはいえないが、よそ者に頼るのではなく、地元から世界をつくり出すためのしくみが示され、循環型の社会の創出をめざしている。

藤山(2022)によれば、世界では「循環革命」が起きていて、地球環境保全の知見からは、エネルギー自給をめざす村落がドイツやオーストラリアは散見されるようになったそうである。日本では、内閣府により地方自治体の脱炭素戦略を促そうと、「地域脱炭素ロードマップ」を示され、2050年に二酸化炭素の排出ゼロ(脱炭素)を達成しようとする全体像が示されている。脱炭素をめざし、炭素排出をゼロにすることは、私たちが達成すべき「待ったなし」のテーマである。

私が研究している持続的な森林利用と管理については、脱炭素に寄与するだけでなく、森林資源の利用循環を促すための「循環革命」をめざしている。木材の利用は、プラスチックなどの他の素材に取って変わり、国内では外材が輸入されると、国産材の価格はピーク時の6~7分の1にまで低下した。木材利用の循環を促し、国産材の利用を高めることで、地域の森林資源を循環させ、地域産業の活性化の契機になると考える。林野庁の林政審議会に委員として参加していた時の議論では、森がどうしたら経済的に豊かになる山になるか、国策を考えることに主眼が置かれていた。

ただ政策の実現には、政府によるトップダウンの動きだけでは難しく、地域住民(市民)によるボトムアップのアプローチが必要である。研究と教育にかかわる私たちが大学に留まらず、社会に訴え草の根的にムーブメントを起こすことはできないだろうかと考えてきた。

地域から循環型社会を内発的にめざす取り組みは、国内外の各地で始まっていて、「協働で動きたい」と思える魅力的な地域や組織がいくつもある。2月末現在、春から千葉へ戻るか、福岡にとどまるのか、自分の居場所がまだ決まっていないが、関係を構築してきた地域とつながりを維持しつつ、森林をはじめとする自然資源が循環する仕組みを創り出す実践に取り組んでいこうと考えている。ボトムアップ・アプローチとは、内発的な組織をつくり出すことにある。小学校教員から大学教員まで務めた自分が得意とする教育の専門性を活かしつつ、今後も子どもたちや学生を育て、循環型社会を地域で起こせる内発的な組織づくりに努めたい。私でできることがあれば、世界中の何処へでもでかけるので、ぜひ声をかけてほしい。

### 【引用文献】

藤山浩(2022) 地域を支える力と仕組み~地域社会の生態系をつくる~. 林業技術 962:2-6.